



UNIC Tokyo Dateline UN

March 2004 Vol.48

国際連合広報センター

アナン国連事務総長、2年ぶりの来日 ～初の国会演説、記者会見ほか～



©UN/DPI Photos by Eskinder Debebe

コフィー・アナン国連事務総長が2004年2月21日から25日まで、4泊5日の日程で日本を訪問しました。イラク戦争の余波もあって昨年は訪日の機会がなく、2年1カ月ぶりの訪問でしたが、国連事務総長として初めて国会で演説したのをはじめ、政財界首脳とも率直な意見交換ができ、日本と国連の関係にとってもタイムリーで意義深い訪問になりました。

アナン事務総長は到着から一夜明けた22日(日)朝には明治神宮を訪れました。権宮司の案内で参拝し、雅楽を見学し、静寂のなかでお茶を楽しんだ事務総長は、イラク問題をはじめ国連が直面する数々の難題から



らいつとき解き放たれて、リラックスできた様子でした。このあと事務総長が世界の有識者16人を集めてつくった国連改革賢人会議メンバーでもある緒方貞子国際協力機構(JICA)理事長(前国連難民高等弁務官)と昼食をともにしつつ意見を交換しました。(次頁へつづく)

INSIDE

事務総長の来日をふり返って	2
ブラヒミ事務総長特別顧問、来日記者会見から	2
日本政府との協議 会談後の記者発表から	3
事務総長による国会演説(部分) 記者会見(部分) 写真でみる来日の模様	4-5
日本経団連での会合から	6-7
グローバル・コンパクト 世界の動き～フランス～	7
世界のおコメと暮らし展	8

<http://www.unic.or.jp/>

夕方からの川口順子外相との会談では、イラクの復興支援をはじめ中東和平、アフガニスタンの復興、朝鮮半島情勢、国連改革など幅広いテーマをめぐって話し合いが行われました。中東産油地域の大国であるイラクがこのまま不安定な国になってしまうことは誰の利益にもならず、国際社会は協力して復興を支援しなければならないという点で、双方の意見は一致しました。

翌23日(月)午前、事務総長は皇居で天皇陛下とお会いしたあと、日本経団連を訪問し、奥田碩会長(トヨタ自動車会長)をはじめとする財界首脳との昼食会に臨みました。アナン事務総長が世界の企業とパートナーシップを結んで人権、労働、環境の3分野で前進をめざす「国連グローバル・コンパクト」に日本企業がもっと参加してほしいと期待を表明したところ、奥田会長も「積極的に考えます」と応じ、事務総長を喜ばせる場面がありました。

午後には公明党の神崎武法代表らと意見交換。夕には首相官邸で小泉首相と会談しました。首相はイラク支援をめぐる日本政府の考えを説明、事務総長はイラクの主権回復、選挙実施に関する考えを説明しました。続く夕食会には緒方貞子氏や奥田碩会長、明石康・元国連事務次長、日本で最初にグローバル・コンパクトに参加したキッコーマン株式会社の茂木友三郎社長らも出席しました。

24日(火)は自民党の「国連貢献議研」の中山太郎会長代行(元外相)、山本一太事務局長らと朝食をともにして国連改革などをめぐって意見を交換。正午からは国会を訪問、参議院本会議場で国連事務総長として初めての国会演説に臨み、国連としてイラクの主権回復と新たな政権づくりを支援する用意があるとした上で、日本がイラクに示している「連帯姿勢」を称えました。さらに、国連改革とくに安保理改革が進展しないことへの「失望感を共有する」と述べ、国連に対する日本の不満の一因である「敵国条項」については「時代錯誤」と表明、日本の国連通常予算の分担率が「過大になっている」ことや日本人職員が少な過ぎることに積極的に触れて国連批判を気遣うとともに、日本側の理解を求めました。

午後には民主党の菅直人代表、羽田孜元首相らと会談、そのあと日本記者クラブでの記者会見に臨み内外記者の質問に答えました。

東京での日程の最後に事務総長は裏千家今日庵東京道場を訪れ、千玄室・前家元(日本国連協会会長)と旧交を温めるとともに、お茶を楽しみ、くつろぎのひとときを過ごしました。

25日午前、事務総長は意義ある訪問になったと喜びつつ、成田からニューヨークへ向け離日しました。

(文・国連広報センター所長 野村彰男)



裏千家今日庵東京道場を訪れ、くつろぎのひとときを過ごすアナン事務総長。早春の梅に迎えられた事務総長は、日本でのすべての日程を終えて穏やかな表情を見せた ©UN/DPI Photo by Eskinder Debebe

ブラヒミ事務総長特別顧問、日本で記者会見

事務総長の来日と時を同じくして、国連事務総長特別顧問を務めるラフダール・ブラヒミ氏が2月23日から4日間、日本を訪れました。来日の目的は国際問題研究所主催によるシンポジウムへの出席と日本政府関係者との意見交換でした。ブラヒミ氏は25日に日本記者クラブで会見を行い、イラク問題を中心に約40分間、日本のメディアに熱心に語りかけました。



記者会見に臨むブラヒミ氏(写真提供・日本記者クラブ)

国際社会の無関心はアフガニスタンで大きな犠牲を生み出す結果となった。これを反省点とし、イラクに関しては国連や日本を含む国際社会が常に関心を示し続けることが求められている。

私がまとめた「イラクに関する調査報告書」にあるように、主権は6月30日に回復されるべきだが、それまでに選挙を実施することは不可能だと多くのイラク人は気づいている。主権の回復と選挙を切り離して考えることが重要だ。

独裁と度重なる紛争を体験したイラクが目指しているのは、最も公平で最も自由な選挙ではない。その結果を大多数のイラク人が受け入れることのできる選挙を目指している。

また、多くのアラブ人の心に根ざしているのは、パレスチナ問題だ。彼らは、パレスチナ人が苦悩を続けていることと国際社会の沈黙に対して憤りを感じている。

日本政府との協議

今回の来日の主な目的は、国際社会が直面する課題について日本政府と緊密な意見交換を行うことでした。アナン事務総長は小泉純一郎総理大臣、川口順子外務大臣とそれぞれ会談を行いました。以下は、会談後に行われた記者発表における事務総長の発言内容です。

■イラクでの選挙メカニズム構築が必須の課題■ ～小泉総理との会談を終えて（2月23日）～

イラクに関して、そしてブラヒミ氏*が先導するイラクへの視察調査団について、総理と話し合う機会を持つことができ、光栄です。

明日（2月24日）、ニューヨークで発表される「イラクに関する報告書」の中で示されているいくつかの提案についても総理に説明しました。私たちは選挙の問題が非常に重要であり、前進するための方法が必要であるという認識を共有しました。国連はイラクの人々とともに、6月30日に予定されている統治権の移譲を実現させるため、イラク人による暫定政権樹立のメカニズム策定に尽力しています。

本会談では、国連の役割と国連がイラクへ戻ることの重要性についても話し合いました。そして私は、治安が

安定しているならば、国連はいつでもその役割を果たす準備があること、またそのための計画を日本政府と共有することを約束しました。イラク国民にとっても、また国連の現地での活動にとっても、安全の確保は必須条件です。

安全が確保されれば、安保理が示したように、国連はその役割を果たす準備ができており、自らその準備を進めています。国連と多国間主義に対する小泉総理の多大なるご尽力に感謝します。国連と日本政府、そして日本の方々との関係を構築するために日本を訪れることができたことを大変嬉しく思っています。

*ラフダール・ブラヒミ 事務総長特別顧問のこと。



©UNDP/Photo by Eskinder Debebe

■日本との強靱なパートナーシップを再確認■ ～川口外相との会談を終えて（2月22日）～

世界情勢の極めて重要な時期に訪日できたことを大変嬉しく思います。外相とイラク、アフガニスタンなどの早急に取り組むべき様々な課題について建設的な意見交換を行いました。

イラクの人々が主権を回復し、平和で民主的な安定した国を構築するには、国際的協力が不可欠です。この点に関して、私は外相と“イラクに関するフレンズ・グループ”が果たし得る重要な活動について話し合いました。訪日直前、私は設立直後の同グループとニューヨークで会談し、その席には日本の大使も出席していました。

外相と私は、新聞の表紙を飾ることはなく、テレビでも放映されることはないような、しかし早急な対処が必要とされる多くの問題についても話し合いました。例えば、開発、疾病、HIV/エイズ、日本が大いに注目しているアフリカの開発、そして紛争予防などについてです。日本はこうした分野においても先導的な役割を担っており、外相からは日本の貢献を約束していただきました。

国連改革に関するパネルについては、その活動によっ

て国連が変わり、本来あるべき効率的な機関となることを期待します。58年間の歴史を経て、私たちは障害に直面しています。しかし自らを批判的に見直し、直面する挑戦を分析しなくてはなりません。もし直面する挑戦の課題や性質が変化した場合、それへの対応もまた、変わらなければならないのです。経験と知性に富む緒方貞子氏（前UNHCR）がパネルのメンバーであることを嬉しく思います。先程、緒方氏にお会いし、パネルの活動についての説明を受けました。

本会談で、私は国連と日本の強靱で価値あるパートナーシップを再確認しました。多くの問題が山積みする今日において、国連と日本が相互に信頼し合うことができるというのは心強いことです。



©UNDP/Photo by Eskinder Debebe



国会演説

アナン事務総長は2月24日、参院本会議場で衆参両議員を前に演説を行いました。国連事務総長が日本の国会で演説を行うのは今回が初めてです。約20分にわたって行われた演説のなかで、事務総長はイラク問題、国連改革、北朝鮮など幅広いテーマに触れ、21世紀の国連にとって日本の果たす役割が大きいことを強調しました。以下は演説の主要部分です。

■国際社会のなかの日本

あらゆる国連加盟国には、感銘を与える物語、憧憬と闘争の歴史があります。日本の物語は、特に心に訴えるものです。貴国は、戦争の灰燼の中から活気ある繁栄した民主主義国家を造り上げました。それは世界中の人々に希望を与えています。

核兵器による破壊の恐ろしさを知っている唯一の国として、日本は平和と核軍縮の最もたゆまざる支持者の一員です。私のみならず国連のすべての加盟国が、国際社会における日本の現在の地位を明確にしているその強力な世界的な市民としての活動を賞賛しています。

■イラク問題

戦争前にどんな意見を有していようと、今日私たちのだれもが、平和なイラクが地域及び国際社会において適切な地位を再び占めることに共通の利益を見出しています。主権の回復は安定にとって不可欠です。国連は、イラク国民が自らの運命を再び自分たちの手に握り、自らの一体性と領土保全を維持し、法の支配に基づいた、すべてのイラク人に対して自由と平等な権利と正義を与える正統性のある民主的な政府を樹立するために、すべての可能な支援を行うことを約束しています。

国際社会が一致してイラク人を支持すれば、乗り越えられないものではありません。日本はこの挑戦に率先して向かい合ってきた国の一つです。貴国は、復興に対して寛大な貢献を表明しました。また、困難な議論を経て、貴

国は人道復興支援を行うためにサマワに自衛隊を派遣しました。

■国連改革

安保理改革に関する対話が、ほとんど進展もなく長い間続けられてきたことに対する皆様の失望感を共有します。安保理が改革され、また拡大されなければならないことについては、事実上すべての国連加盟国が合意しています。しかし合意に達することの困難さを、合意に達しないことの言い訳にしてはいけません。国連憲章に時代錯誤の「敵国条項」が存在すること、通常予算の分担率が過大になっていると同時に国連事務局の職員数について日本が過小にしか代表されていないと感じていることが、日本の方々がいら立ちを感じる原因となっていることも承知しています。しかし、このような不満が多国籍主義及び日本のグローバルなリーダーシップに対する日本のコミットメントを損ねることがないことを希望し信頼しています。

■北朝鮮

私たちは、核兵器のない朝鮮半島を確保するため日本の積極的な外交的関与を必要としています。日本と朝鮮民主主義人民共和国が、拉致問題及びその他の両国間の未解決の諸問題を完全に解決することを希望します。この問題が関係する人々及びその家族の方々には大きな苦痛を与えてきたかを理解するとともに、苦痛を受けたすべての人々に深い同情の意を表します。

記者会見

国会演説後の2月24日夕、アナン事務総長は日本記者クラブにおいて合同記者会見を行いました。日本での会見はおおよそ3年ぶりであって、約200名のメディア関係者が集まり、会場は熱気に包まれました。事務総長は冒頭スピーチに次いで行われた質疑応答で、記者からの相次ぐ質問の一つひとつ丁寧に答え、国連に対する理解を呼びかけました。



Secretary-General Annan met government officials, business leaders, parliamentarians and other opinion leaders.



【写真上段より左から右に】

天皇陛下下のご会見、明治神宮参拝、自民党の国連貢献議研メンバーとの朝食会、阿部正俊外務副大臣による空港での出迎え、緒方貞子 JICA 理事長との屋敷会、公明党の神崎武法代表との会談、民主党の菅直人代表との会談



All photos credited: UN/DPI Photo by Eskinder Debebe

Q：イラクにおける国連の役割とその活動再開について聞きたい。

A：私はイラクにブラヒミ氏率いる調査団を派遣し、彼らは十分な仕事をし、報告を行った。私は、国連がイラクの人々が進むべき道を明確化するために支援をすること、調査団を再びイラクへ戻すことを提示している。しかし、より多くの国連職員がイラクに戻り、活動を再開するためには、まず治安状況が改善されなければならない。

Q：国連分担金と日本の分担率についてどう見るか？

A：これらは加盟国が解決する問題で、分担率は2006年に見直しされる予定だ。安保理の改革に関しては、議論はかなり長い間続いているがあまり成果は上がっていない。しかし新たに設立したパネルに期待をしている。イラク危機という困難を昨年乗り越え、安保理の改革の必要性、そして安保理と国連の構造を早急に今日の現状に見合うものにする必要性を実感している。国連60周年にあたる来年にこの問題を解決できることを期待する。

Q：イラクへの国連平和維持軍の派遣は考えているか？

A：国連平和維持軍がイラクに送られることは予想していない。しかし、統治権がイラク人に移譲した後、治

安と再建につながる環境づくりを支援するために多国籍軍を組織するよう安保理が決定することは考えられることだ。

Q：過去に実施された国連のイラクに対する制裁をどう考えるか？

A：国連が安保理決議をもってイラクに対して制裁を加えたことは確かだ。国連事務局は一般のイラク人が苦しまないように石油食糧交換プログラムを実行した。多くのイラク人にとって国連は2つある。まず制裁を加えた加盟国としての国連。また決定事項を施行し、援助を供給する石油食糧交換プログラムを運営する事務局としての国連。全てのイラク人が国連を英雄として見ているかは不明だが、最近の調査団の報告によると、根本的に国連は彼らを助けてくれる必須の機関と考えられており、国連の助けを歓迎するとのことだ。

Q：国連改革について聞きたい。

A：これは加盟国自身の問題だが、私は安保理が改革されるべきだと信じている。存在している理事会の構造は1945年の地政学を反映しているのは明らかだ。安保理がより多くの代表者となり、民主的で、そして権威あるものとなるために、国連は安保理を改革する必要がある、そうなることを考える。

グローバル・コンパクトへ すべての日本企業が参画を

アナン事務総長は来日中の2月23日（月）、東京で開かれた日本経済団体連合会（以下、日本経団連）主催の昼食会に出席し、日本の財界リーダーらと意見交換を行いました。会合には、国連が企業との新たなパートナーシップを呼びかける「グローバル・コンパクト（GC）」に参画中の日本企業トップも出席。事務総長は日本におけるGCの広がりに大きな期待を寄せました。以下は、冒頭スピーチからの抜粋です。



日本経団連の奥田碩会長（左）とアナン事務総長
©UN/DPI Photo by Eskinder Debebe



私が「グローバル・コンパクト（GC）」を提案し、経済界の指導者の皆さんに人権、労働、環境の分野での普遍的原則を受け入れていただくよう呼びかけてから、もう5年が経ちました。

私がGCを提案したのは、グローバル市場が共有の価値と責任ある実践に根ざしたものとならなければ、世界経済は脆弱で、反発を招きやすいものになるだろうとの懸念を抱いていたからです。付け加えて言うならば、この提案はシアトルそして世界中で起きた反グローバル化のデモよりも前に提示されたものです。

これらの理由から、私は企業に対し、国連と協力して社会的な支柱を構築、強化することを求めました。私は財界の方々に、啓発された利益追求を実践するための手段としてGCに参加し、より安定的で包括的な市場の実現に貢献するよう呼びかけました。喜ばしいことに、GCへの参加企業は現在、日本を含めて、70カ国以上で活動する1,200社以上に及んでいます。

日本でもGCが花開いていることは、喜ばしい限りです。日本企業はすでに、幅広い産業およびセクターで世



日本経団連で財界リーダーと意見交換を行ったアナン事務総長（中央）
©UN/DPI Photo by Eskinder Debebe

界経済の指導的地位を確立しているばかりでなく、企業市民という分野でもますますリーダーシップを発揮しつつあります。

全世界で、日本企業は革新性に富み、極めて高品質の製品を生産することで知られています。そのことと普遍的価値への真摯なコミットメントとを結びつけば、日本企業はいわゆる「責任ある競争力」からさらに大きな利益を得ることになるでしょう。

GCの基本的な使命は、私が5年前に提案したものとまったく変わりありません。それは次のとおりです。

- ①各国政府によって古くから認識されているものの、まだ十分には行きわたっていない普遍的な原則（人権、労働基準、そして環境の分野）を受け入れることにより、グローバルな倫理的枠組みを構築すること
- ②今日、社会が直面する幅広い課題を解決する上で、企業がどのようにしてその一翼を担えるかを示すこと
- ③実際のプロジェクトとイニシアチブを明らかにし、これに重点を置くこと
- ④社会のその他あらゆるアクターとどのように協力できるかを学ぶこと

多くの多国籍企業を抱える日本にとって、安定的で包括的なグローバル経済が極めて重要であることは明白です。2001年1月、日本企業としては初めて、キッコーマン株式会社がGCに加わりました。今日、日本の参加企業は14社にのぼっています。これは心強い限りですが、まだできることはたくさんあると思います。

私は本日、すべての日本企業と企業グループに対し、GCの原則への明確なコミットメントを示すことにより、グローバル・コンパクトを支持していただくよう呼びかけたいと思います。ニューヨークでの大規模なグ

ローバル・コンパクト・サミットを今夏に控え、私はさらに多くの日本企業に参加いただけることを期待しています。このサミットにはGCに参加されている取締役会長や経営最高責任者(CEO)を招き、この5年で何が得られ、GCをどう改善していけるかを検討します。私は日本経団連がその大きな影響力を行使して、会員企業全社に参加を呼びかけていただけるものと確信しています。

日本企業の多くはすでに、グローバル・リポーティング・イニシアチブ(GRI)を活用しています。このことはさらに大きなはずみとなるはずです。なぜなら、GCとGRIは車の両輪の役割を果たすからです。GCが責任ある企業市民のための価値観に基づくプラットフォームであるとすれば、GRIは人々に対する公の説明責任を果たす上でのモデルとなります。

日本企業やその他のステークホルダーの積極的な参加により、GCが企業市民を発展させる有益な場を提供するとともに、「より持続可能な、かつ、包括的な世界経済」を生み出す手助けとなり、その結果、グローバルイゼーションの恩恵が世界の貧困層を含め、あらゆる人々に行きわたるものと、私は楽観しています。

最後に2003年に創設されたグローバル・コンパクト・ジャパン・ネットワークについて一言言わせて下さい。このネットワークは私たちのパートナーシップをさらに前進させる上で、重要な役割を果たすことになるでしょう。ネットワークは、財界の方々のニーズに応えるとともに、日本国内、国外の企業およびその他の企業責任集団とのパートナーシップを構築することを具体的に目指すアプローチを作り出すこととなります。経験の共有を通じ、ネットワークはグローバル・コンパクトの諸原則を前進させる一方で、日本の企業社会独特の価値体系と風土にこれを適切な形で組み込んでゆくことでしょう。

〈グローバル・コンパクト参画日本企業〉

キッコーマン株式会社	王子製紙株式会社
株式会社リコー	坂口電熱株式会社
アサヒビール株式会社	アルファEC株式会社
アマタ株式会社	朝日新聞社
株式会社ジャパンエナジー	株式会社東芝
屋久島電工株式会社	日産自動車株式会社
富士ゼロックス株式会社	
国土環境株式会社	(2004年3月上旬現在)

〈グローバル・コンパクト情報〉

日本語:<http://www.unic.or.jp/globalcomp/index.htm>

英語:<http://www.unglobalcompact.org/>

グローバル
コンパクト
世界の動き

France

国内のGCネットワークを設立

フランスでは1月27日、「フランス・グローバル・コンパクト・ネットワーク」が設立されました。大統領官邸であるエリゼ宮で行われた設立式典には、200人を超えるフランスのビジネス・リーダーが出席し、GCに対してより積極的に取り組む決意を新たにしました。

式典に招かれたアナン事務総長はスピーチの中で、「このような素晴らしい全国的な運動を展開し、GCに実際的な意義を与えたビジネス・リーダーの方々に感謝します」と述べ、フランスGCネットワークが他の国でのネットワーク作りのモデルとなることに期待を高めました。また、GCが現在取り組んでいる「透明性と腐敗防止」に関して、フランスでこのたび「政策対話」が行われたことに触れ、事務総長は「腐敗との闘いは私たちが掲げる全ての原則を意味あるものにする上で不可欠です」と述べ、関係者がこうした認識を高めるよう促しています。

一方、シラク大統領はスピーチの中で企業が社会で果たす役割を強調するとともに、結束を強く呼びかけ、貧困の根絶に向けてよりパートナーシップを高めるよう求めました。



エリゼ宮で行われた式典には200人を超えるビジネス・リーダーが出席した ©UN/DPI Photo by Sergey Bermeniev

フランスからは244社が参画しています。主な企業・団体はエールフランス航空、アクサ生命保険、フランス中小企業開発銀行、フランス・テレコム、フランス・ガス、ラ・ポスト(フランス郵政公社)、エルメス・インターナショナル、ロレアル、ブジョー、ルノーなど(2004年3月現在)。

2004年は国連が定めた「国際コメ年」です。

南極を除いて世界のあらゆる場所で栽培されるおコメは、アジア、アフリカ、アメリカの10億世帯を栄養、雇用、収入面で支えています。その他にも環境、文化、文明などのおコメを取り巻く様々な環境が、私たちの暮らしと密接に関係しています。

汐留シオサイト“ギャラリー・ウォーク”で現在開催中の「世界のおコメと暮らし～おコメ、私たちの命～」では、世界でおコメがどのように作られ、いかに生活に密着しているかを、国際コメ年カレンダーに採用された世界12カ国の写真パネルを通して紹介します。



©FAO Photo

世界のおコメと暮らし
～おコメ、私たちの命～

期 間：3月1日（月）～5月31日（月）
時 間：午前10時～午後6時
場 所：汐留シオサイト“ギャラリー・ウォーク”
（港区東新橋1-7-1 共同通信社本社ビル
汐留メディアタワー3階）
主 催：国際連合広報センター
国際連合食糧農業機関（FAO）日本事務所
問合せ：国際連合広報センター（担当・葉袋）

ギャラリー・ウォークのご案内

<http://news.kyodo.co.jp/info/gallerywalk/index.html>



おコメのパフレット、できました！

私たちの暮らしを支えてくれるおコメ。でも、身近にありすぎて案外知らないことも多いのでは…？

当センターでは、「国際コメ年2004」をきっかけに多くの皆さんにおコメを知っていただこうと、手のひらサイズのわかりやすいパンフレットを作りました。世界のコメ生産高、コメの最大の輸出国など、クイズ形式で楽しみながらおコメに詳しくなれること間違いなし。かわいいおコメのイラストが満載で、子どもから大人まで幅広く読んでいただけます。

このパンフレットをご希望の方は、当センターまでファクスにてお申し込みください（送料のみご負担願います）。



発行：国際連合広報センター

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 5-53-70 UN ハウス 8階

TEL: 03-5467-4451

FAX: 03-5467-4455

URL: <http://www.unic.or.jp> / E-mail: unic@untokyo.jp